

韓国の恨言説の日本における受容と展開：

80年代から2010年代までの韓国文化論

古 田 富 建

帝塚山学院大学教授

Abstract: This article introduced the papers about the Han discourse that was accepted and developed in Japanese society. As its feature, many of these papers were influenced by O-young Lee. In addition, as a characteristic of the Han discourse in Japan, these papers developed the theory about Han in association with religious fields such as Confucianism and Shamanism rather than literature. In order to understand modern Koreans, Korean society and its culture, these papers included a lot of content that linked modern current affairs of Korea with Han.

キーワード：言説、韓国文化論、恨

1. 恨について

現代の韓国人にとって恨(han)は、韓国人の美意識、民族的心性、伝統的かつ独自の情緒、倫理観として認識されるものであり、悲哀、怨念、遺恨、反感、日常的なフラストレーションなどと説明されてきた。韓国人は自国の文化を知る枠組みとして恨を理解しており、恨なしには韓国文化は語れないという。またそれは日本や中国の「怨み」とは異なるものと解釈されてきた。

恨の議論は戦後まもなく文学の世界から始まったが、現在はジャンルを越え、哲学、心理学、民俗学、宗教学、神学、社会学、医学・看護学などにおいて学際的に研究されており、一つの思想と呼べるほどの広がりを見せている。現在韓国内で発表された恨に関する学術論文は学内学術論文が約475本、学位論文が378本、単行本が2149冊¹⁾ある。

日本においては韓国人の国民性を語る際によく言及される代表的なものであり、韓国文学や文化を云々するたびに必ずといっていいほど登場するキーワードでもある。2000年代の韓流ブーム以降にあっては、小倉紀蔵がテレビドラマのような大衆文化にも恨が見られると書き、2016年に朴槿恵大統領退陣デモが起きれば、虐げられてきた者の恨がパワーに変わったことがデモの原因だと指摘される²⁾。

では、日本で韓国人論を語る際に語られる恨の定義について考えてみたい。『韓国民族文化大百

科辞典』では、「欲求や意志の挫折とそれに伴う人生の破局など、それに直面している偏執的で強迫的な心の姿勢と傷が意識・無意識のうちに絡まった複合体を指す民間用語。しこり³⁾」と記されている。普通の日本人が恨について理解することは、実は容易ではない。以下に、代表的な論者の定義を挙げてみる。

「恨」とは自分の内部に沈殿して積もる情の塊であり、恨は自分自身の所望が何かの挫折にあったときに生じる実現されなかった夢であり、怨恨とは異なるものである。(李御寧)

韓国人の「恨」の観念には2つの様相が存在する。自虐的な涙の中に痛みよりも甘さを感じ容易く諦める情恨のような感情と、復讐感情を持ち怨恨のような感情である。(文淳太)

このような概念の複雑性は、辞書上の定義あるいは外国語への翻訳がままならない要因にもなっている。

本論は恨を「韓国の固有の民族性である」という本質主義的な見方（思想や哲学）ではなく、構築主義的な立場から恨という言説の構成過程を分析するものである。

つまり恨という思想の実態解明ではなく、韓国で発生した恨に関する言説が日本社会にどのように受容されて語られたのかを80年代から2010年代にかけて見ていく。

2. 日本の文化人・評論家による恨言説の誕生

84年にはNHKでハングル講座の開始、87年には民主化が達成され、88年にはソウルオリンピックの開催が決まると、日本では「韓国ブーム」が起こり旅行や料理などの面で韓国が注目され、第一次韓国ブームと呼べる社会現象が起こる。カジュアルなルポタージュである関川夏央の『ソウルの練習問題——異文化への透視ノート』（新潮社、1984）がよく売れたのは政治経済ではない文化的な側面にスポットライトを当てた「等身大の韓国」を理解したいという日本人の欲求を象徴的に表している現象であった。日本社会における韓国文化論本の相次ぐ出版は、上記のような日本の時代背景に根ざすものであった。

一連の社会的な流れから、それに呼応する形で日本において韓国を文化的にも知ろうとする動きが出てきた。その中で日本人、もしくはニューカマーの在日コリアンによる韓国文化論がこの時代出版されるようになる。「韓国文化＝恨」という言説は、この時期の韓国文化論者（評論家や研究者）によってもたらされ、日本に根付いていった。

また軍事独裁政権期が終わり、多くの研究者が韓国に留学し、専門的な研究を発表しだした時期でもあった。

80年代から90年代後半にかけて総務省の日本人の韓国に対する親近感度は徐々に高まり、2000年には半数以上の国民が韓国に対して親近感を持つに至った。それは2002年日韓ワールドカップ

共催を目前に控えて韓国と「仲良くしていく、しなければいけない」という社会的な同調圧力が働き、マスコミがこぞって韓国特集をした時期でもあった。その中には『Newsweek 日本版』（2001年5月16日号）の巻頭特集「韓国をうらやむ日本人—— エステから経済改革までかつて軽んじた国に憧れる理由」や『日経トレンディ』（2001年9月号）の特集「韓国人気で分かる日本が失ったもの」という日本社会において内発的に韓国社会から学び知ろうとする動きの一例ともいえるであろう。この現象を小倉紀蔵は「ルックコリア」現象⁴⁾と称した。

この時期は表面的な隣国理解だけではなく、見えない文化にも関心が広がった。韓国特集の番組や韓国関連の新書の発行はもちろんの事、2002年には川村湊編『思想読本（6）韓国』（作品社、2002）が出版される。韓国の民主化以降、隣国に対する興味はサブカルチャーや、生活文化、グルメといった日常の延長での韓国理解であり、戦後一貫して思想ジャーナリズム、つまり日本をリードする知識人は「韓国」に関心を持ってこなかった。この書籍は「思想」として韓国を捉えようとする書籍であり、画期的な書籍であった。こういった社会背景の中で日本人もしくは恨言説生産者第一世代の韓国人ではないニューカマーによる恨言説が日本に登場し、日本の新聞にも恨という用語が登場してくる。以下ではこの時期の恨言説について考察していく。

日本人執筆の韓国本で恨が初見されるのは豊田有恒『日本人と韓国人ここが大違い』（文藝春秋、1985）である。反日感情および国民性を恨とし、それは「心の奥底の澱、諦めの境地⁵⁾」と述べている。88年に外交評論家の加瀬英明が『「恨」の韓国人「畏まる」日本人』を出版したが、そこで豊田とは正反対の恨論を展開する。恨は韓国独特のものであり、日本語の「うらみ」とは異なり、内に向けられたものであり、激しい自責の情念から生まれる。英語では「フラストレーション」（満たされない欲求）であるが、それよりも遥かに自分を減ほしかねない強いうらみであるという。自分が無力であるために、どうしても果たしたいと思っていたのに果たせなかつたうらみが、内面に鬱積してこもったのが「恨」であり、この恨こそが韓国人のエネルギーの源であり、60年以降の経済成長（恨晴らし）は恨によってもたらされたという⁶⁾。

加瀬の恨論には「忠臣蔵」の怨み論も登場するなど、李御寧の恨論⁷⁾を踏襲しているが、その後日本人によって書かれた恨論においては、李御寧の審美的な恨のイメージは絶大な影響力を持って再生産されていく。加瀬の恨論はそこに「反骨精神」を見いだした金容雲を付け加えたような理解をしている。

90年代に日本語で書かれた韓国文化論でもベストセラーとなった書籍がある。それは呉善花の『スカートの風』（三交社、現在は角川文庫）シリーズである。彼女は83年に日本に留学してきたニューカマーであり、東京外国語大学大学院（英米地域研究）在学中に、このシリーズを執筆する。その後彼女は通訳翻訳業に携わりながら98年に日本に帰化し、現在は拓殖大学国際学部教授でありながら、日本の保守嫌韓系の言論人を代表する1人として多くの嫌韓本を執筆している。

彼女の恨論は90年代と2010年代で論調は大きく変わるが、ここでは90年代の恨論を概観し考

察する。

90年代に発表した呉の恨論は『続 スカートの風——恨を楽しむ人々』（三交社、1991）の「第二章 恨を楽しむ人々 韓国人の情緒と反日感情の実際」と『新 スカートの風——日韓=合わせ鏡の世界』（三交社、1992）の「「恨」と「もののあわれ」」、『ワサビと唐辛子 恨の国・韓国から見た「受け身文化」の国・日本』（祥伝社、1995）の「もののあわれと恨」の3本の論稿があるが『新スカートの風』と『わさびと唐辛子』の内容は似ているため、ここでは『スカートの風』シリーズの2冊を取り上げる。

呉は恨を「うらみ」とは異なる韓国特有の情緒であり、今まで審美的に語られていた恨を生活に密着したものと捉えている。そして結論として「韓国人にとって生きることそのものが恨である。自分の願いが達成できないとき、自分の無能力が恨になることがある。そこでは恨の対象は具体的に何かというのがはっきりしないのが特徴だ⁸⁾」としている。

そして恨はどちらかという未来への希望のために持ち出されるものであるため、「～すれば恨がなくなるだろう」という未来形を使った言い方をよくする。恨の解消は将来に向けての願望の意味で使う。だから恨があること、恨みをもっていることは、悪いことではない。あるからこそ未来への希望がもてる。このような恨理解は初期の李御寧の「願恨論」をベースにした焼き回しと言えるが、苦難の歴史や民族意識、美意識など観念的なところに恨を見いだすのではなく、「生きることそのもの」という日常性の中に恨を見いだした点と「対象の曖昧性」は対象に向かう攻撃性が見られない点にその感情の薄さ、カジュアルさを感じる。後悔や苦しみを総括したような格好つけた表現とも言える恨はその対象がより薄まった使われ方をしているのである。これは既存の韓国の文学研究者が提唱してきた恨論と大きく異なる独自性と言えるだろう。

韓国研究情報システム⁹⁾のキーワードに「恨」という項目で単行本を調べると、題名および書籍の小項目で引かかる書籍の数は2149冊の書籍が確認できる。その著作の実に64%¹⁰⁾が文学理論ではない文学作品、自叙伝、歴史書の題名や小項目に恨が登場する。その使われ方は先行研究で言説を細かく見てきた¹¹⁾ような深い意味合いが見られないものであり、「千秋の恨」といったお決まりの慣用句的なフレーズや、「後悔」や「苦しさ」を表す典型的な用語として用いられているのである。つまり呉が浮き彫りにしたような民族性や歴史性を背負っていない、芸術性や宗教性といった深い意味が込められていない身近で軽い日常的な欲求不満の意味での恨言説こそが植民地解放後一貫してもっとも使われてきた恨の使われ方である。

また呉は「～であればいいのに」という未来形の使われ方をしてきたという指摘も恨がいかに思想的な意味を含めない日常的な素朴な願いを込めた表現であるかを物語っている。その日常の恨を呉は「明確な対象がない」と述べているが、まさにその通りである。

しかしその後にかかれた『新スカートの風』において呉は恨を「もののあわれ」と比較し¹²⁾以前の恨論よりも恨を観念的、抽象的なものとした概念を提示する。恨は人間ならばだれもが世の中を生きる中で抱え込んでいくことになる不完全さや欠如の感覚に発している。その限りでは「も

ののあわれ」とよく似た心情だとしている。しかし恨ではそうした弱さが否定的に捉えられてその解消へと向かおうとする。一方「もののあわれ」では内面の弱さを肯定し、それを抱え込んだまま生きようとする語る。

それを踏まえて呉の恨論は『続スカート風の風』と比較すると次のように変化する。

恨は単なるうらみではなく、達成したいこと、達成すべきことができない自分の内部に生まれる、ある種の「くやしき」に発している。それが具体的な対象を持たないときは自分に対する嘆きとして表わされ、具体的な対象を持つとそれがうらみとして表されるのだといってよいように思う。そしてさらに重要なことは、そうした恨を解いてゆくことが美徳ともされ、美意識ともなる、ということである¹³⁾。

まず恨を自分に対する「悔しさ」から生まれたものであり、それを解くことが美意識とつながるものと認識している。そしてその対象が具体的なものでない場合は嘆きとなって自分の中に溜まるが、悔しさの対象が明確な場合はそれが「うらみ」となって現れるという。実はこの「うらみ」としての恨論が約30年後にクローズアップされ嫌韓保守の恨論の1つのイメージを形成していく。

呉善花が95年に『ワサビと唐辛子』を出版した同年に、通信社記者の栗村良一が『「恨の国」見聞録 現代ソウル16景』（共同通信社、1995）を執筆する。この書籍は現代政治、説話、歴史認識、地域感情など様々なトピックを扱ったルポ＝見聞録である。そのトピックには韓国人の奥底、感性の内懐に潜む「恨」が潜んでいると説く。著者はあとがきにおいて恨を「悲しみの涙」と言葉を置き換えても良いと評しており、韓国人は情が多く、涙が多い民族であるが故に彼らの心情の深層に思いをめぐらしつつ書いた結果は様々な場面で恨＝「悲しみの涙」の風景が浮かび上がったという¹⁴⁾。筆者は韓国人の恨の物語を書こうとした明確な意図はなかったが、個別の事象を書くうちに結果として殆どのトピックが恨と関連した内容となった。それは対象の韓国人の方から「勝手に」にじみ出てきたものと述べている。

また李朝の「恨五百年」といわれたように、恨は朝鮮（韓国）民族に昔から伝統的に受け継がれてきた心情¹⁵⁾とも述べている。

ここで恨というのは怨みのような他人や外部に対する感情ではなくて、自分の胸の内部にも降り積もる情のかけらであり、「悲しみの涙」である。それは不幸な状態にあって叶えられた望みや夢がなしとげられることによってしか、解くことができない。

韓国人はよく自分たちのことを「情の多い民族、涙の多い民族、恨の多い民族」と言う。ここまでの多難な歴史をかいくぐる中で、そういう民族的な性格が形作られてきたのだろう。

離散家族を招待した秋夕の望郷の歌番組の司会者が語った通り、韓国人は涙と恨の多い民族だ。韓国人の恨とは「悲しみの涙」のことだ。それは怨みや怨念のように自分の外の他人に向けられた思いではなく、自分の胸のうちに沈んで積もる情のかけらのことだ。自分の「悲しみの涙」を晴らすこと、つまり自分のかなえられなかった夢を実現することでしかその恨を晴らすことができない。離散家族にとっての恨は引き裂かれた肉親と再開し、ともに暮らすことができたときに初めて解くことができるのだ。その日まで、分断された恨＝「悲しみの涙」は南北の住民の心のうちに降り積もることをやめないだろう。¹⁶⁾

本著では説話の一つである「沈清伝」を紹介している。この説話は韓国人の心情の核心である恨の物語であり、それは日本人が考えがちな怨恨や恨みつらみの感情とは異なると評している。主人公の孝行娘沈清の恨は怨念のように自分の外の人に向けられた思いではなく、自分の胸のうちに潜んで積もる情のかけら、つまり「悲しい涙」のこと¹⁷⁾だと語る。それは他人に対する怨恨や復讐とは無縁の「自分がどう救済されるか」を主題とした、個人的な内部のレベルで完結して解決されるべき心情¹⁸⁾である。

「韓国名はアンムニョン」の章では離散家族と亡命者の恨を、「植民地と時代の雰囲気」の章では民族抹殺の歴史への恨、「女はつらいよ」と「沈清（シムチョン）」の心の章では現代に生きる沈清や春香といった説話の恨を、「統一されなければよいのに」の章では南北分断50年の恨について述べられ、朴正熙元大統領の貧しさに対する恨＝「悲しみの涙」は漢江の奇跡という経済建設によって貧しさの追放を実現したときに、初めて解くことができた。朴元大統領のライバルであった金大中も、北朝鮮スパイの金賢姫などにも不幸な境遇や生涯にも恨は積もるなど何でも恨を見いだしてしまう。本著の特徴は説話など既存の韓国文化論に見られたもの以外にも、時事ネタや現代史に恨が見いだされていく。

個人レベルの恨と民族性としての恨がどうつながっていくのかが理論的にはつながらない。たとえば粟村は南北朝鮮で愛されている春香伝についても言及しているが、「民族性」であるはずの「伝統的な恨」の物語である春香伝が北朝鮮では換骨奪胎して抵抗闘争や偉大な指導者への忠誠心を称えたり、革命劇の装いを施した愛の物語に変わる。これは「恨の変質であり、自己否定」であるが、北朝鮮の人民個人にはそれぞれの恨＝「悲しみの涙」が降り積もると評する。

しかしそもそも恨が「民族性」であるならば（民族性の存在有無の議論はここでは置いておく）南北で変わらず存在する心性と考えるべきであり、一方で変質するものが民族性なのかは理解に苦しむ。粟村の恨論は思想的な深みは見られない。韓国の様々な事象をすべて恨に還元してしまっている印象もある。

粟村の恨論は李御寧の恨論に極めて近い、「悲しみの涙」という悲哀の美に近い定義からそれを解消して、願いを叶えようとするという「指向性」を帯びているものである。

3. 日本における研究者の恨言説

これまで見てきた韓国文化論は、韓国思想や哲学を専門とする研究者によるものではなかった。80年代後半から研究者も恨についての評論および論文を投稿するようになった。研究論文は必ずしも大衆向けに書かれた物ではないだけに敷居が高く、流通力も文化人が書いた物に比べると劣ることは否めないが、中には新書という比較的親しみやすい形態で出版されたものもある。ここでは研究者によって評論、考察された恨論を見ていきたい。

3-1. 文学研究の恨言説

元圓光大学教授で文学評論家の千二斗（1930-2017）が書いた「韓国的「恨」について——特に日本のもののあわれとの比較を中心に」『朝鮮学報』（131輯，1989）は、恨研究において極めて重要な論稿であり、翌年同文が韓国語に翻訳されて韓国でも紹介されている¹⁹⁾。千二斗は60年代中盤から韓国文学における情恨について考察²⁰⁾し、恨言説が活発になってきた80年代にそれを体系的にどう捉えるかという問題意識をもって研究し、93年に韓国において『恨の構造研究』（文学と知性社）という哲学・思想的なアプローチで恨を捉える言説の集大成的な書籍を発表する²¹⁾。以降この書籍は本質論的に恨を捉える論者によって盛んに引用されていくものとなっていき、「韓国的「恨」について——特に日本のもののあわれとの比較を中心に」（89）はその元になる重要な論稿である。

本論文は前半は恨の構造について先行研究を批判的に検証し、後半では日本の類似概念である「もののあわれ」と恨を比較している。ここでは恨言説において大きな影響を与えた前半部に絞り紹介していく。千二斗は恨を韓民族独特の情緒表現として捉えているが、その概念が明確になっていないとし、先行研究の批判をする。恨の議論は主に情恨の議論（金東里、河喜珠など）と怨恨の議論（金烈圭、李在銑、金芝河など）に要約できる²²⁾とする。情恨論の特徴は多情多恨の情緒的側面に注目し、その多情で繊細な情緒的側面を恨の固有性として捉えようとしている。怨恨論の特徴は「結び」と「解き」の二元対立論にその特徴がある。情恨論が見逃してきた点は「積極的で粘り強い側面」であり、怨恨論においては「二元対立」的に恨を捉えている点を批判する。千二斗によれば恨は否定的属性が絶え間なく超克され、だんだんと肯定的属性へと質的变化をなしている一元論的な価値生成の機能を持つ物であり、「情恨論」も「怨恨論」の要素を併せ持ったものとしている²³⁾。恨は肯定から否定の属性に移行する動的なものであり、移行する際にサギム（삭임：怒りを静める、柿が熟す、酒が発酵するの意味）という積極的な機能をもっているとする²⁴⁾。

3-2. 儒教研究と恨言説

儒教思想的なアプローチとして初めて恨について言及した日本人研究者は韓国朝鮮思想を専門とする筑波大学名誉教授である古田博司である。古田から10年ほど遅れて、京都大学教授の小倉

紀蔵が続く。

韓国思想の碩学である古田博司と小倉紀蔵はそれぞれ『悲しさに笑う韓国人』（86）、『朝鮮民族を読み解く』（95）と『韓国は一個の哲学である』（98）『心で知る韓国』（2005）において、儒教社会、儒教思想の観点から恨について言及している。

古田は李御寧の「自分の果たせなかった思い、無念さ」を恨と捉えるが、李が主張するような美しき「美意識」ではなく、「意識構造」であると述べる。そしてこの強い願いである恨が解消されない場合は、宗族の中で雪のごとく降り積もり継承されていくと説く²⁵⁾。民族性というよりは儒教的な血統主義つまり血の中で代々継承される「宗族意識」の中に恨の連続性・継続性を見ているのである。しかしその恨というのは李朝時代から今日まで変わらず精神労働（学業）のみの成果を問われる。「恨とは確かに1つの夢である。そしてその夢の殆どは血胤のステータス上昇の夢なのである」²⁶⁾と述べる。恨はそれが血統の中で学業的な成果が出るまでは、学業に挑み続けるという再生産の歴史性を帯びたものと捉えているが、古田が見いだしているのは、何かをなしたいという願望というよりも、儒教の影響による崇文主義が強く残る韓国社会の中で知的労働者や専門職を国民皆が羨望しそれを目指すという社会構造を述べている。

その後古田は『朝鮮民族を読み解く』（1995、ちくま書房）において恨は「朝鮮民族の歴史的個性として非常に特徴的なものであり（中略）伝統的規範から見て責任を他者に押し付けられない状況の下で階序型秩序で下位におかれた不満の累積とその解消願望」と定義し、精神科医の症例を紹介している²⁷⁾。90年代中盤に火病と恨の関連性を指摘した研究は韓国国内においても少なかった。古田のこの定義は Wikipedia の日本語版において、恨の定義としても記述されるだけでなく、2010年以降に登場する嫌韓ナショナリズムの中の恨言説にも大きな影響を及ぼす。

一方小倉は『韓国は1つの哲学である』（1998、講談社）で朱子学の理気論で韓国における思想や事象を解説するが、恨とは日本語に当てはまる言葉としては「理を体現したいというあこがれ」であり、上昇へのあこがれと同時に、そのあこがれが何らかの障害によって挫折させられたという悲しみ・無念・わだかまり・つらみの思いでもある²⁸⁾と李御寧の審美主義的な願望論を基礎とした恨論を展開している。ただ恨が日本語の恨みとは異なるということから、復讐を伴う恨みの情がないという主張は誤りであり、韓国人の復讐心と嫉妬心は強い²⁹⁾と否定している。

古田博司同様、小倉は儒教という枠組みから恨を捉えているため、恨は（儒教）社会の意識構造（知的生産者、専門職として社会に認められたい）という欲求を表している。理気論で恨を述べるのであれば、気側の恨はあこがれと無念を自己内で醸し出してゆくという方向性をとるが、理側の恨はあこがれを実現させるために上昇への克己に励み、障害を打倒して「理」を合一しようとする。

小倉の『心で知る、韓国』（岩波書店、2005）では恨はあこがれだが、それを儒教が裏側から支えているとして次のように説明する。

儒教、特に朱子系の性善説の儒教は、徹底的な上昇志向の思想である。どんな人でも善性＝道徳性を100%もっていて、それを努力して磨いて発揮すれば社会的に上昇できると考えられている。ところが現実には人間はそれぞれに様々な問題をかかえていて、そのために上昇できずに挫折する。(中略)つまり原理的には自分も自らが理想とする場所、あこがれの位置に立つことができるが、現実的には挫折してそのような場所に立つことができない無念・悲しみの思い。それこそが「ハン」なのである³⁰⁾。

金烈圭は恨は「白い恨」と「黒い恨」があると語っているが、「白い恨」は「あるべき姿・場所」、
「黒い恨」は挫折の悲しみを他者に転換する「怨恨」といえ、暗い情動ではなく、未来志向的な「夢」「憧れ」という側面を提示し、「怨恨論」の金烈圭と「情恨論」の李御寧を組み合わせた恨理解を示している。「怨恨論」と「情恨論」を融合させた理解は任軒永、文淳太など80年代の文学者の中には既に見られていた。

両者の恨論の特徴は儒教思想とその影響を受けた社会から考察しようとしている点、目指すものが「夢」という李御寧の「願恨論」の影響とも言える単語を使っている点である。そして恨の元来の置かれている状態を古田は「果たせなかった思い、不満の累積」、小倉は「挫折の中の無念や悲しみ」としている。しかし古田は「恨とは美意識ではなく血統の中で獲得したい学歴的ステータス願望、不満の累積の解消を目指しているため解くべきもの」という領域へと変化がみられる。一方小倉は挫折のあるべき場所へと指向する未来志向的な白い恨と相手を怨む黒い恨とに区別する。白い恨の方は李御寧や栗村と同じようなベクトルを示すが、黒い恨の方は他律的な解けない領域にある。

3-3. 巫俗研究の恨言説

日本において最初に日本語で紹介された纏まった最初の恨に関する学術研究といえば崔吉城の『恨の人類学』(平河出版社、94)である。これは『韓国人の恨』(礼典社、91)の日本語翻訳本で467頁という大著である。崔は人類学的な理論、調査を駆使して多くの論文を執筆してきたシャーマニズム研究者であり韓国人ネイティブでありながら長く日本の大学で教鞭をとった人物である。

本著の問題意識は韓国人は本当に恨が多い民族なのか、そうであればその正体はなんであり、韓国文化の中でどのような意味を持つかという、恨を民族文化の根底と捉えて研究の問題設定がなされている。それを主に巫俗研究の領域を中心に、先祖供養や自殺、文学など幅広いテーマから迫ったのが本著作である。

崔は恨を高銀の「永遠的に絶望が生んだ諦念と悲哀の情緒」と捉え、それは韓国固有のものであり、韓国の歴史の中においては人々は心の痛みを募らせ沈めてきたそれであり、ほとんど遺伝

的とでもいっていい様に蓄積されてきたものとして捉えている。また文学でいうならば「私を捨てていった君」などに対しての感情であり、怨恨、恨望、不条理、憎悪、嫉妬といったものが積み重なるという恨に関する指摘も存在するが、その恨のイメージの多くは怨恨を長く抱く韓国民族がそれをどう解消しているのか、してきたのかという金烈圭の怨恨論と相当重なるものである。それを社会学分析と類似した方法で恨の蓄積と表現の過程を時間の流れに沿って考察しようとした。

また恨の文化を人間関係において不当であると感じる時、鬱屈し腹立たしい感情を呼び起こされるかかる感情には具体的、個人的な「私憤」と抽象的、制度的な「公憤」とがあり、我々はそのような怒りに対して反対給付でもって復讐しようとする感情を誘発させる。崔はこれを「恨の文化」と呼んでいる。韓国の巫俗は韓国人のこうした感情を処理する機能を追っており、巫俗は原則として怨恨の多い鬼神を取り扱い、それ故生前の怨恨関係を死後の巫俗の世界に期することによって直接・間接的に復讐を防ぐメカニズムとして作用した。強い復讐心や怨恨を呪術や死後の世界に帰することによって社会的怨恨、復讐関係を和らげる社会的な機能を果たす。

ムーダンに対する差別、怨霊信仰、前近代社会における女性の恨、死と巫俗との関連（自殺や祭祀）などの論稿がインタビューや調査によって見事に浮かび上がっているが、恨をキーワードにしてその基底を流れる心情を浮き彫りにしようとした。少題目には「差別と恨」「母と恨」などがついているものの、恨自体がそれぞれとどういった関連になるのかといった構造的な指摘はあまり見られない。

正直な所、崔が提示した恨概念と彼の研究の関係がよく分からない。崔吉城は高銀の恨の定義を援用したとするが、高銀の恨の「復讐感情への革新」という要素を恨解き文化として大きく採り入れようとしたのかもしれないが、考察しようとしている対象と高銀の定義には大きな乖離しか見られない。むしろ李御寧の「解しの文化」で語られる恨や金烈圭の怨恨と巫俗や怨恨信仰について詳細に述べた『怨脈恨流』などをその定義として採用した方が、崔の問題関心や恨論においても近いと考える。

また本著は巫俗信仰には恨があるという前提で、論が展開していく。重要な概念である恨という用語は文学的審美的な情恨論の影響をも指摘しているが、それが本著で見ようとした復讐という怨恨に近い概念も混ざりどういう構造になっているのか、そして調査した様々なトピックと関連し、恨がどう有機的に結びついているのかが分からない。

社会学においても 90 年代後半に崔の社会劇の理論や巫俗研究に刺激を受けた業績が発表される。真鍋祐子の『烈士の誕生——韓国の民衆運動における恨の力学』（平河出版社、1997）である。韓国は 30 年近い軍事独裁の中、市民の連帯から民主化を勝ち取っていくというドラマチックな現代史を持っている。当然その中では多くの犠牲が伴うが、民主化闘争の中で倒れていった犠牲者、民族の殉教者は「烈士」と呼ばれ祀り上げられる。その犠牲の形は当然政府当局からの弾圧による拷問死も見られたが、韓国の場合自ら焚身自殺を選び軍事政権を糾弾するというケース

が多々見られたのが特徴であった。この焚身自殺が「名誉の犠牲」へと昇華され、さらなる能動的な力がなぜ生まれるのかという問いを、シンボリック相互作用論的な視点やV. ターナーの「社会劇」という理論を用いながら考察した労作である。儒教イデオロギーの強い韓国社会では孝思想が強く、親よりも早く死んだり、「身体髪膚これを父母に受く」のタブーを破る自殺は強い忌避の対象となるが、本書ではなぜこれほどの「自殺者」を生んだのかを解明している。烈士の死は、「民主の祭壇に身を捧げる」ために死の儀礼が実行され、その犠牲者は社会とその遺族や成員が活力を回復するために不可欠な犠牲、つまり「孝」よりも高い「義（社会的次元の孝）」と解釈されていったのだ。また韓国の場合未婚者の死、横死は非業の死であり、そこにはつねに「冤魂を慰撫する」ための通過儀礼が巫俗の儀礼を踏まえつつ、実行されていた。

本書ではその原動力を「恨」を用いて語る³¹⁾。その定義は人類学者の金成礼の「死者の慰められぬ魂のイメージと、生者の心のなかにある悲哀の残滓ないしはフラストレーション」という2つの「悲劇の集成的感覚」を恨として、そして民衆神学者徐南洞の弱者の抱く敗北意識や虚無感、諦念といったものが昇華された「情態的恨解き」と弱者の生に対する失念が反乱のエネルギーとして積極的に作用する「積極的恨解き」を組み合わせ、民主化運動における若者の「死」への理解や意味付けをしようとする。前述したとおり韓国の儒教文化の文脈では寿命を全うできなかった死はタブーであり葬礼を施される対象ではない。悲哀の心理過程は「怨」という個別的悲哀から死者との対話が模索される。残された者の中にある悲哀の残滓は「悲劇の集成的感覚」となり「恨」になるという。遺族たちは反体制運動側（運動圏）に参加していく悲哀をめぐる社会過程において「怨」から「恨」へ、さらに「恨」を解体するすなわち「恨解き」へ、敗北意識、虚無感、諦念といったものが昇華される「静態的恨解き」から反乱のエネルギーとして積極的に作用する「動態的恨解き」へと悲哀の作業を展開していく。その結果として故人の遺志は社会化されて、民主主義、民族統一は成し遂げられなければならないものとなり、民主運動を動かしていく原動力となるのである。つまり民主化における大量の犠牲的な死はどう生まれ、死によっていかに社会が突き動かされていくのかのダイナミズムを解明している。

最後には、「恨の力学」の源泉について述べている。先に、真鍋の本論稿の執筆動機を「あとがき」から見ておく。

今も忘れ難い一つの光景は、光州望月洞の五・一八墓域において、つい先ほどまでおどけていたはずの学生たちがいっせいに沈黙し、畏怖の面持ちでこうべを垂れる姿であった。私はそこに何やら立ち入ってはゆけない空気を感じながら、自分がこのような感覚を共有できない“外国人である”という現実とせざるをえなかった³²⁾。

真鍋は、韓国で共有されているこうした意識の源泉は、『“孝”の生命論』を基調とした“冤

魂”思想」にあり、「それに伴う時間および空間を超越した“共生”の感覚」にあると結論づけている。これらは、90年代の「示威文化」にも帰結するものと指摘している。

崔吉城と真鍋の恨論は、「巫俗」をテーマにしていたり、一つの手掛かりにしていたりする恨論である。韓国での恨言説では、巫俗の怨霊信仰と絡めた言説も、恨言説の大きな柱になっているが、日本での恨言説では巫俗の話題は研究者の中に閉ざされており、一般的にはあまり表に出てこない。また、真鍋は民主化運動中の焼身自殺を題材にしており、金芝河の「ルサンチマンとしての恨」言説を追補するような研究である。その後の嫌韓論者の間では、「ルサンチマンとしての恨」言説が主流をなし、「弱者のひがみ根性」としてネガティブに描かれることになる。真鍋の分析にはネガティブな色合いはなく、恨と恨プリ構造のダイナミズムを解明することに主眼が置かれており、真鍋と嫌韓論者の言説のずれにも注目していく必要がある。

3-4. センチメンタリズムとしての恨

時代が遡るにつれ本国の恨研究を踏襲しながら持論を展開する研究が登場し始める。ここからは比較的最近の本国の恨の研究史を踏まえた研究群が登場してくる。

ここまではあまり韓国での恨言説の議論が紹介もしくは援用、踏襲されてこなかったが、水野、金慶珠はそれまでよりは韓国における議論を踏襲しながら論を展開している。

水野邦彦『韓国社会意識素描』（花伝社、2002）「恨の構造——『西便制によせて』³³⁾」は90年代の大ヒット映画『西便制（邦題『風の丘を越えて』）』（以下『西弁制』）にあらわれた「恨」³⁴⁾を通して韓国固有の心情と韓国文化の姿を浮かび上がらすのが目的の論稿である。

恨は韓国人特有の心情であり、なかなか理解しにくく、日本語の「うらみ」は復讐という意志的行動として表れ、晴らすものであり、韓国語の怨とも類似している。怨と恨は連続しているものであるが異なる。

水野は主に怨と対比しながら金烈圭、白尚昌、丁太絃などの恨の定義を紹介しながら、恨とは「悲しみ、苦しみ、悔みといった感情が、発散されることなく内に閉じ込められ、それが心のなかでしこりとなって内面化したものであり、自虐的なものである」と説く。水野の主たる骨格は文淳太のものである。そして恨の「結び」と「ほぐし」という2つの側面があることを強調する。

文淳太は「恨とは何か」という論稿で恨とはなんで、その思想的系譜はどこに繋がり、その根源は何かを探っている。恨は「情恨」と「解恨」の2つ要素があり、「情恨」は芸術、「解恨」は行動によって解かれるという二重構造を示している。特に離別と待ちの消極的な情緒である「情恨」は復讐の暴力を誘発しない芸術による消化が必要で、その具体例としてパンソリや仮面劇を通じた解恨を提示している。

『西便制』のパンソリの道を極めようとする少女の物語であり、水野は文の定義に従ってパンソリは「恨」を解く過程を含む芸術、解恨の芸術であると紹介する。劇中において養父が意図的に自分の目を潰したことを感じ、少女は恨を宿すが、少女はそれに埋もれることなく、自分の「恨」

をパンソリにおいて表現する。それは取りも直さず「恨」を得る行為である。解恨の行為がパンソリを通して、つまり芸術的表現を通して果たされる。

これまでの日本の恨論は、現地の恨論とは一定の距離を置き、日本という外国目線から独自の恨論を展開していくことが多かったが、水野は韓国人研究者の延長線上に立った、内側目線での研究を行っている。

3-5. ハン思想 (Hanizm) と恨言説

最後に、日本で大学教授、文化人として活動している金慶珠の『恨の国・韓国——なぜ日韓は噛み合わないのか』(祥伝社, 2019)を取り上げる。金は、本著の冒頭で、次のように恨を語る。

恨(ハン)と書いて、「うらみ」と読む。でも、それはあくまでも日本語での話。韓国語で〈ハン(한)〉とはひとつ(one)を意味します。「完全なる統合体」。これこそがハンの真髓であり、ひとつであると同時に、すべてを意味する概念です。そしてこの完全なる一つとしてのハンが崩壊するとき、韓国人の心は、その混乱や挫折に対して複合的な思いを、もうひとつのハン(恨)へと転換させていくのです³⁵⁾。

このように、金慶珠は「恨」と韓国語では表記が同じであるもう一つの「ハン」である「ハン思想(Hanizm)」を持ち出したことが特徴的である。

「ハン思想」は、80年代序盤頃³⁶⁾から韓国を規定する固有の思想として研究され始めたもので³⁷⁾、韓国人の間では広く知られているものである。ハン(한)は固有語で「一つの」という意味だが、ハンゲル(한글)のハン(偉大な)であったり、三国時代の馬韓・辰韓・弁韓のハン、大韓帝国・大韓民国のハンなど、民族にとって大切なものにハン(한)が多用されていることから、「ハン」という言葉が持つ思想的背景を探る研究が盛んに行われるようになった。檀君神話、花郎徒などの歴史、東学や甌山教、圓仏教などの民族宗教、パンソリや文学などの伝統芸術から生活様式に至るまで、幅広く分析されている³⁸⁾。下記の引用は金慶珠の恨についての日本の「和」と比較しながら述べた定義であるが、これは60年代からされてきた恨の議論とは全く異なる新しい定義であり、その定義は恨ではなく「ハン思想」の定義といえる。

恨の価値観において優先されるのも「現実的な調和」ではなく、一つという理想の実現に向けて「正しく、最高で、正確な中心」を見いだそうとしている姿勢です。それが人間関係であれ、社会のあり様であり、理想の求心点を見いだすための葛藤や争いであるならば、それ自体の価値は認められるのです³⁹⁾。

小倉紀蔵は、「ハン思想」こそ民族の核心概念であるとし、80年代に、儒教から距離を置き、シ

チャーマニズムや東学などの「民衆文化」が着目される中で「ハン思想」が見いだされ、構築されたナショナリズムの一表象であると説明している⁴⁰⁾。恨研究よりも後に登場したものだが、「ハン思想」の方が韓国アイデンティティそのものを規定しているのである。その意味で、この著作は「恨の国・韓国」ではなく、「ハン（思想）の国・韓国」とする方がふさわしいように思う。

また、「恨」も「ハン思想」も同じ「한（ハン）」という表記であることから見分けがつかず、読者にとって混乱の元ともなっている。

しかしいくつかの書籍において恨はハン思想の一部もしくは過程として若干言及される程度である。例えば『韓国哲学事典』⁴¹⁾においては「恨」と「ハン思想」は別項目で記載されており、まったく別物⁴²⁾と理解するのが2つの研究分野における一般的な見解である。

また金慶珠は恨を「完璧になる結合体への願望⁴³⁾」と評し、恨を情恨論や願恨論の「集結する恨」と、他者への攻撃性を伴う怨恨や現実放棄の嘆きに支配される「分散する恨」とに2つに集約して再解釈する。そして両者は共通して「ひとつであり、中心であり、正しさでもあるハン」という理想を求めつつも、それが崩壊するか破壊されるなどの「不完全で理不尽な情態」を強いられる時に生まれる感性や理屈とし、「ハン（ひとつ）に始まり、ハン（恨）が生まれ、再びハン（ひとつ）に終わる」というハンを基軸として脈々と受け継がれてきた民族の集団無意識であり、思考様式⁴⁴⁾」と韓国では異なるものと理解されている恨とハン思想を融合して捉えている。

金慶珠のもう一つの特徴は、古田博司や小倉紀蔵によって「儒教」と絡められてきた恨言説に、「儒教以外のもの」も持ち込んだ点である。金慶珠は古田と小倉の恨論を「強者と弱者という縦軸の関係設定であり、いわば勝ち組と負け組の上下関係における「負け組の痛恨の思い」がハンの正体⁴⁵⁾」とまとめあげ、朝鮮社会の階級論や儒教的道徳論に基づいたハン理解を次のように批判する⁴⁶⁾。

朝鮮時代を支配した儒教道徳論に「不当な支配者に対する憤慨の正当化」のような論理は見当たりません。むしろ「支配階級の正当化」のために用いられたのが儒教ですから、そこからハンの仕組みを読み解こうとする試みは、まるで儒教という数式からはみ出た端数を、無理矢理に儒教の論理で切り上げようとする強引算法のように思えます。

この書籍は恨という韓国文化論のキーワードを用いた新書形式の大衆に向けた日韓比較本であり、ハンの定義の後、「格差社会の恨」「家族・民族の恨」「帝国の恨」という章で現代韓国事情を解説するが、個別の事象の中で何がハンなのかがうまくすくい出せていない。また先行研究に対する不勉強さや学説史における間違った認識などが散見されるのが残念である。

4. まとめ

80年代後半から00年代までの時代は、韓国における恨言説の第一人者の翻訳本が出版された後に、それを踏襲しながら日本社会の文化人や研究者によって作られた時代であった。90年代後半から韓国文化における思想への注目も見られ始め、この時代の議論を踏まえて新聞などにも恨(ハン)という用語が見られるようになり韓国文化・社会=恨というイメージが形成されていく時代であった。

この論稿では12人の恨論を紹介したがその半分以上が恨の形成期と言える60-70年代の李御寧と金烈圭の恨論を踏襲、もしくは影響を受けていた。特に李の影響が大きく日本社会の恨言説において李御寧の影響が如何に大きいかを窺い知れる。誤解を恐れずに言えば70年に李御寧・金烈圭らが語った韓国のある種のイメージに韓国社会や文化を還元して見つめようとしている、つまり未だに日本社会は「70年代の恨言説」を引きずっているとも言える。

しかしそれは李御寧以外の韓国の恨言説の議論をあまり受容していないことの裏返しでもある。もちろん恨についての定義は諸説あるだけでなく複雑であり、その研究史を追うことは決して容易ではないが、88年に出版された著名な作家や研究者が執筆した恨をテーマとした論文集『恨の話』や、恨研究の集大成本と言える千二斗の研究などがほとんど参照されていない。

日本の恨言説の特徴としては、文学よりも儒教や巫俗といった宗教分野に恨を見いだしている点を上げることが出来る。また生活や現代時事に恨を関連付けて、現代韓国人や韓国社会・文化を理解するのに利用しようとした点も挙げられる。韓国では民謡や説話などの過去の産物から恨を探す言説が多いのと比べて特徴的である。

これは80年代以降の韓国国内において議論が深まる中で構築された比較的新しい恨論と同じになっている。実はこれが大きく変わるのは2010年以降の嫌韓右派文化人による恨言説が生まれてからである。嫌韓右派の文化人の恨言説は別稿で詳述する。

注

- 1) 2021年6月9日に学術研究情報システムの検索データベース (<http://www.riss.kr/index.do>) で調査した数字である。
- 2) 小倉紀蔵『心で知る、韓国』(東京:岩波書店, 2005), p2.
- 3) ドラナンダ・ロヒモネ「韓国人はなぜデモがそんなに好きなのか」『ニューズウィーク(日本ネット版)』(2019年8月19日) https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2019/08/post-12786_1.php
- 4) 小倉紀蔵『韓流インパクト ルックコリアと日本の主体化』(講談社, 2005), p10.
- 5) 豊田有恒『日本人と韓国人ここが大違い—誰も書けなかった隣国人の意識と行動』(文藝春秋, 1985), p99-100.
- 6) 加瀬英明『「恨」の韓国人「畏る」日本人』(講談社, 1988), p64-66.

- 7) 李御寧が発表したエッセイ『恨の文化論』（78）に収録されている論稿「恨とうらみ」では日本の忠臣蔵と韓国の春香伝を比較しながら恨は①自分の内部に沈殿し固まる情②かなえられなかった望みであり実現されなかった夢という特徴を持つと語っている。
- 8) 呉善花『続・スカートの風 恨を楽しむ人々』（三交社, 1991）, p83.
- 9) <http://www.riss.kr/index.do>（確認日 2021 年 8 月 14 日）
- 10) 書籍名および書籍の目次でヒットする小題目に「恨」が含まれるものを調査した。内容の分類として「詩・エッセイ」「文学（小説）」「文学（古典・説話）」「文学（その他）」「文学（紀行文）」「伝記・自叙伝」「文学学術書・評論」「歴史」「宗教・思想」「芸術」「心理学・自己啓発」「民俗学」「法律・政治」「自然科学」「健康・福祉」「その他スポーツ」「日本」という項目に分類し調査した。
- 11) 拙論「韓国的キリスト教と恨：韓国土着キリスト教の救済論」（東京大学博士論文, 2013）
- 12) すでに千二斗が「韓国的“恨”について—特に日本のものの哀れとの比較を中心に」『朝鮮学報』131 輯（朝鮮学会, 1989）という論稿を発表しているが、呉がそれを参照した形跡は見られない。
- 13) 呉善花『新スカートの風 日韓=合わせ鏡の世界』（三交社, 1992）, p178.
- 14) 栗村良一『「恨の国」見聞録 現代ソウル 16 景』（共同通信社, 1995）, p295.
- 15) 栗村良一『「恨の国」見聞録 現代ソウル 16 景』（共同通信社, 1995）, p119.
- 16) 栗村良一『「恨の国」見聞録 現代ソウル 16 景』（共同通信社, 1995）, p236.
- 17) 栗村良一『「恨の国」見聞録 現代ソウル 16 景』（共同通信社, 1995）, p111.
- 18) 栗村良一『「恨の国」見聞録 現代ソウル 16 景』（共同通信社, 1995）, p212.
- 19) 千二斗「韓国的「恨」について—特に日本のもののあわれとの比較を中心に」『国語国文学研究』vol.13.（圓光大学校人文科学大学国語国文学科）pp. 65-86.
- 20) 「情恨の伝統と素月の詩」『韓国語文学』1 号（1963）, 「恨的・人情的な小説の論考」『文学』7 号（1963）など
- 21) 日本語翻訳版は千二斗『韓国的恨と明と暗 文学先品における恨の考察』（広島：エミスク企画, 2002）
- 22) 千二斗「韓国的「恨」について—特に日本のもののあわれとの比較を中心に」『朝鮮学報』131 輯（朝鮮学会, 1989）, p97.
- 23) 千二斗「韓国的「恨」について—特に日本のもののあわれとの比較を中心に」『朝鮮学報』131 輯（朝鮮学会, 1989）, p98.
- 24) 千二斗「韓国的「恨」について—特に日本のもののあわれとの比較を中心に」『朝鮮学報』131 輯（朝鮮学会, 1989）, p99.
- 25) 古田博司『悲しさに笑う韓国人』（人間の科学社, 1986）, p210-11.
- 26) 古田博司『悲しさに笑う韓国人』（人間の科学社, 1986）, p213.

- 27) 古田博司『朝鮮民族を読み解く』（ちくま書房, 2005), p150. (= 1995)
- 28) 小倉紀蔵『韓国は一個の哲学である』（講談社, 1998), p45.
- 29) 小倉紀蔵『韓国は一個の哲学である』（講談社, 1998), p47.
- 30) 小倉紀蔵『心で知る、韓国』（岩波書店, 2012), p4-6.
- 31) 日本の研究者において「恨」と「怨」について初めて学術的に述べたのは滝沢秀樹「怨と恨—民衆史の方法に関連して」『韓国社会の転換 変革時代の民衆世界』（御茶の水書房, 1988）の論稿であり、民主化運動原動力としての恨について語っている。
- 32) 真鍋祐子『烈士の誕生—韓国の民衆運動における恨の力学』（平河出版社, 1997), pp.410-411.
- 33) 初見は「「恨」の文化論」『法政大学教養部紀要』第98号社会科学編（法政大学教養部, 1996）, p31-42.
- 34) 姜信子『安住しない私たちの文化—東アジア流浪』（2002, 晶文社）も同様のテーマで論稿を書いている。
- 35) 金慶珠『恨の国・韓国』（翔伝社, 2015), p12.
- 36) ハン思想の専門書籍は、シン・ジョンイル『ハン思想』（ハン思想研究所, 1981）が最初であると推察される。
- 37) 日本においても李光潑の『カウンセリングにおける禅心理学研究』（1994）が心理学との関わりで韓国の固有思想として初めて言及し、その後申昌浩が「ハンと韓国宗教史」で韓国の宗教史を「ハン思想」から外観するという論文が執筆されている程度である。ハン思想に関する業績を学術研究情報サービスで検索すれば題名もしくは小項目に入れている書籍と論文は現在のところそれぞれ約80程度ある。恨は論文数500にのぼり、恨言説に比べては微々たる数であり、日本語で書かれた業績が少ないのも頷ける。
- 38) 意味は大きい、高い、全体的で一つである一元論的な存在で、神羅万象の根本的実在でもある。他にも一、多という意味もあるが、一であると同時に多である概念であり、単一的であり唯一な存在である。古代の文献では白、道、圓など異なった名前と呼ばれ、儒教や仏教などの伝統宗教はもちろんのこと、東学や甌山思想、圓仏教などの民族宗教は、「ハン思想」を宗教的・哲学的に昇華させたものだという。
 パク・ジェジュ「ハン思想の議論に関する総合的な考察」『韓国固有思想・文化論』（韓国学精神文化研究院, 2004), p213-265.
- 39) 金慶珠『恨の国・韓国』（翔伝社, 2015), p20.
- 40) 小倉紀蔵『韓国、ひき裂かれるコスモス』（平凡社, 2001), p36.
- 41) 韓国哲学事典編纂院会『韓国哲学事典』（図書出版東方の光, 2011）
- 42) その良い例としてChang-Heesonがアメリカで出版した“Haan (한, 恨) of Minjyung Theology and Han (한, 韓) of Han Philosophy” という業績を上げられる。この業績は国内外を問わ

ず、恨とハン思想について本格的に考察した唯一の論考であるが、恨とハン思想とは全く別のものであり、恨は韓国の歴史や文化の中で生まれ、韓国の苦難と民衆神学に関する議論に限定された用語である。恨は他国の文化からも見いだせるが、ハン思想は古代から存在する韓国固有の思想であり、西洋の二元論に近い恨言説を克服できる力を持っていると結論づけている（Chang-Heeson “Haan (한, 恨) of Minjung Theology and Han (한, 韓) of Han Philosophy” (UNIVERSITY PRESS OF AMERICA, 2000)）

43) 金慶珠『恨の国・韓国』（翔伝社, 2015), p66.

44) 金慶珠『恨の国・韓国』（翔伝社, 2015), p60.

45) 金慶珠『恨の国・韓国』（翔伝社, 2015), p23.

46) 金慶珠『恨の国・韓国』（翔伝社, 2015), p24.

参考文献

粟村良一『「恨の国」見聞録 現代ソウル 16 景』（共同通信社, 1995）

小倉紀蔵『韓国は一個の哲学である』（講談社, 1998）

小倉紀蔵『韓国、ひき裂かれるコスモス』（平凡社, 2001）

小倉紀蔵『心で知る, 韓国』（岩波書店, 2005）

小倉紀蔵『韓流インパクト ルックコリアと日本の主体化』（講談社, 2005）

小倉紀蔵「朝鮮の美と時間意識」『立命館法学』333・334号（立命館大学法学部, 2010年5・6号）

加瀬英明『「恨」の韓国人「畏る」日本人』（講談社, 1988）

姜信子『安住しない私たちの文化—東アジア流浪』（2002, 晶文社）

韓国哲学事典編纂院会『韓国哲学事典』（図書出版東方の光, 2011）

金慶珠『恨の国・韓国—なぜ日韓は噛み合わないのか』（祥伝社, 2019）

呉善花『続・スカートの風 恨を楽しむ人々』（三交社, 1991）

呉善花『新・スカートの風 日韓=合わせ鏡の世界』（三交社, 1992）

崔吉城の『恨の人類学』（平河出版社, 1994）

千二斗『韓国的恨と明と暗 文学先品における恨の考察』（広島：エミスク企画, 2002）

千二斗「韓国的「恨」について—特に日本のもののあわれとの比較を中心に」『朝鮮学報』131 輯（朝鮮学会, 1989）

滝沢秀樹「怨と恨—民衆史の方法に関連して」『韓国社会の転換 変革時代の民衆世界』（御茶の水書房, 1988）

ドラナンダ・ロヒモネ「韓国人はなぜデモがそんなに好きなのか」『ニューズウィーク（日本ネット版）』（2019年8月19日）https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2019/08/post-12786_1.php

豊田有恒『日本人と韓国人ここが大違い—誰も書けなかった隣国人の意識と行動』（文藝春秋,

1985)

真鍋祐子『烈士の誕生—韓国の民衆運動における恨の力学』（平河出版社，1997）

水野邦彦『韓国社会意識素描』（花伝社，2002）

パク・ジェジュ「ハン思想の議論に関する総合的な考察」『韓国固有思想・文化論』（韓国学精神文化研究院，2004）

古田富建「韓国的キリスト教と恨：韓国土着キリスト教の救済論」（東京大学博士論文，2013）

古田博司『悲しさに笑う韓国人』（人間の科学社，1986）

古田博司『朝鮮民族を読み解く』（ちくま書房，2005）

沈善映，*THE COLONIAL ORIGIN OF “DISCOURSE OF HAN” AND ITS RELIGIOUS SIGNIFICANCE IN MODERN KOREA*（筑波大大学院修士論文，1998）

Chang-Heeson “Haan (한, 恨) of Minjung Theology and Han (한, 韓) of Han Philosophy”（UNIVERSITY PRESS OF AMERICA, 2000）

<http://www.riss.kr/index.do>（確認日 2021 年 8 月 14 日）

* 本論文は科学研究費助成事業（課題番号 20K20050）の成果物である。